会議録：「第１回恵那市産業振興会議」

日時：平成 31 年 1 月 30 日（水曜日）　15：30～17：30
場所：恵那市役所会議棟中会議室Ａ・Ｂ
参加者：出席 14 人、欠席 1 人（別紙参照）

１．開会
〇事務局「第 1 回恵那市産業振興会議を開会する。」

２．会長あいさつ
〇森岡会長「恵那市産業振興ビジョンについて、平成 29 年度に皆さんで検討し、平成 30 年 3 月に完成した。平成 30 年度はその計画に沿って事業を進行していただいた。本日の会議はその進捗状況の確認を中心に、成果が上がったのか、そこから新たな課題が見つかったのか、事務局から報告いただき、それについて皆さんで議論したい。現在、めまぐるしく環境が変化している。その変化に対応したビジョンとしていきたい。」

３．市長あいさつ
〇小坂市長「恵那市産業振興会議にお集まりいただきお礼申し上げる。昨日、明智中学校で市政懇談会と題して生徒さんと意見交換をした。中学 2 年生から、観光やイベントなどいくつかの提案をいただいた。まちの元気につながることをしたいという強い想いを感じた。私たちが子どもの頃では想像できないくらい、今の子どもたちは、まちの活性化を考えている。子どもたちの将来のためにも、しっかりと議論していかなければならない。政府は、国内景気が戦後最長となったと発表した。多くの人は実感がないとしている。ただ、人がいない、人材がいないというのは、皆さんの肌感覚でも感じているのではないか。外国人の受入れは今後どんどん加速していく。平成の始めには、インターネットやパソコンはそこまで普及していなかったが、今は無くてはならない時代。そして今、新たな大変革が起きようとしている。今後、人がいない中でどうやっていくのか。これが大きなテーマではないかと思う。この変革期にしっかりと考え恵那市の産業発展を促進するために、皆さんと一緒に考えていきたい。」

〇自己紹介
・委員一人ずつ自己紹介。

４．議事
〇事務局「ここからの議事・進行は、当会議の会長、森岡様にお願いする。」

〇森岡会長「次第に沿って進行する。①恵那市産業振興ビジョンの進捗状況について事務局の説明を求める。」

〇事務局
・別紙「恵那市産業振興会議の経過と今年度の作業」について説明。
・別冊「恵那市産業振興ビジョンアクションプラン」及び「これまでの実施事業の成果と課題を踏まえ今後実施すべき事業（案）」について説明。

〇森岡会長「事務局からビジョンの進捗状況について説明があったが、この件に関して意見はあるか。意見がないため、②進捗状況に踏まえた今後の取り組み（案）について、事務局より説明を求める。」

〇事務局「ビジョンは、『商業・観光分野』『工業分野』『林業分野』『農業分野』の 4 つの分野に分けて構成している。別冊『これまでの実施事業の成果と課題を踏まえ今後実施すべき事業（案）』を使い、分野毎に説明する。」
・「商業・観光分野」について、3・4 ページと 13・14～27・28 ページを説明。

〇森岡会長「事務局から『商業・観光分野』の成果と課題、今後実施すべき事業の説明があったが、この件に関して意見はあるか。」

〇委員「過去の事業を検証しながら事業を実施しているかどうか確認したい。」

〇事務局「社会情勢が激変する中で事業の検証を行いながら実施している。」

〇委員「現在、恵那峡では再開発事業が進められている。過去には恵那峡ルネッサンス整備事業があった。そいった過去の事業の検証をして現在、進めているのか。」

〇土屋商工観光次長「恵那峡ルネッサンス整備事業の検証を踏まえて、今回の恵那峡の事業を進めている。公園は景観を良くするために木を切り、駐車場不足の声に応えて、駐車場の整備も行っている。」

〇森岡会長「今までやってきたことには問題や課題もある。そういった問題を意見として皆さんからいただき、このビジョンに反映していきたい。」

〇委員「現在、クラウドファンディングが注目を集めている。このビジョンの中にも事業として上がっているが、先日、串原のささゆり温泉がクラウドファンディングの制度を利用して事業を進めるということで、協力依頼の手紙が届いた。商工会議所の立場と個人的にも協力させていただいたが、本来そういうものなのか疑問を感じた。
知り合いの知り合いが名古屋駅で小さな靴屋を経営しており、自分で材料となる皮を買うためにクラウドファンディングで資金集めをされていた。このことを知り、本当に支援したいと思い協力した。この経営者は、当初の想定額を大幅に超える資金が集まったそうだ。
クラウドファンディングは、本当に良いものを上手く発信していくもの。それを磨いていくことが重要ではないかと考えている。」

〇事務局「ビジョンには、恵那ブランドものづくりコラボレーション事業がある。市内の若手グループが恵那を何とかしたいという想いで事業を検討している。今後も若い力を中心に発信していければと考える。」

〇森岡会長「クラウドファンディングが広がりつつあるが、良い製品があり、

なぜそれが良いものなのかを上手く発信してほしい。地域活性化のためには、その意義までもしっかりと発信することが大切である。」

○委員「『半分、青い。』により、恵那市が盛り上がった。今度は『麒麟がくる』で、また恵那市にもチャンスがある。ドラマ館の建設も進められているが、県がやるのか市がやるのかよく分からない。
岐阜県知事と交流する機会があり、知事はお土産の開発を急いでほしいと強くおっしゃっていた。光秀の子、ガラシャが関係する城には既にたくさんののぼり旗が立てられ、誘致活動を行っていると聞いた。情報を先取りして、どんどん事業を実施してほしい。手遅れにならないように。『半分、青い。』の経験を活かして事業を進めてほしい。」

○土屋商工観光次長「市では 2 月 1 日付けで「大河ドラマ活用推進室」を設置する。県とも情報を共有して、情報を先取りしながら進めていきたいと考えている。地元ではすでに準備委員会を設置して今後の体制について検討している。2 月 6 日には実行委員会を設置し、商品開発を含め、大河ドラマ活用に向けた取り組みを早期に実施していきたいと考えている。」

○委員「明智光秀ゆかりの地は、岐阜県内外にたくさんある。大河ドラマ活用について、他地域との連携をどうするのか。今後、それぞれで実施していくのか。」

○土屋商工観光次長「岐阜県内のゆかりの地としては、山県市、岐阜市、大垣市、可児市、御嵩町、土岐市、瑞浪市、そして恵那市が関係しており、この 8 市町と県で協議会を立ち上げている。県内では、この協議会を中心に事業を進めている。県外でも、滋賀県や京都府などゆかりの地があり、県を通じて連携して事業を進めることとなる。」

○委員「以前から明智光秀ゆかりの地連絡協議会という全国的な協議会が組織されていたと覚えているが、そういったところとの連携はないのか。」

○土屋商工観光次長「全国の協議会は、パンフレット等を作るなど活動を続けており、連携を取りながら進めていきたい。」

○委員「産業振興ビジョンは長期的な取り組みを考えていくものだと捉えている。大河ドラマなどのブームのために取り組むものではないと考える。」

○森岡会長「一番重要なことは、一過性にしないということ。せっかくチャンスが来たのに、継続してやっていかなければいけないということだ。先取りも必要で大河ドラマが始まった時のブームに乗ることも大切。重要なのは、それを継続していくこと。放送されている時だけではなく、その後のお客さんも大切にして継続していくことが大事だ。行政はその支援をする。」

○森岡会長「続いて『工業分野』について、事務局から説明を求める。」
○事務局

・「工業分野」について、5・6 ページと 29・30～39・40 ページを説明。

〇森岡会長「事務局から『工業分野』の成果と課題、今後実施すべき事業の説明があったが、この件に関して意見はあるか。」

〇委員「どの地域も人口減少が進む中、今ある人材をどう活用するかが、カギとなる。人口構造から見ると恵那市の高齢化率が約 33%。恵那市が元気であることは、やはり働ける人に働いてもらうことではないか。ハローワークの統計で 45 才未満の在職率は変わらない。これでは恵那市の人材不足問題は解決できない。
市では、シニアワークステーションの充実や女性の就労支援に力を入れている。シニア層は一番人口構造の多い層。この層の就職率、また、働いていない女性をいかに就職につなげるかがとても重要である。
人材育成は、企業の最大のテーマ。人材育成ができないなら外部から雇い入れるしかない。ある調査で大卒の 40%が再就職しているという結果がある。都会の大学へ進学した方が辞めた時、いかに地元に戻ってきてもらうか。そういった方に、いかに魅力を発信できるかが今後の活動の課題である。」

〇委員「『本社は田舎に限る』という本が映画化される。若い IT 企業の社長が、東京でオフィスを構えていたが人材が集まらないため、徳島県の田舎にオフィスを建てた。『昼休みにサーフィンをしませんか？』という謳い文句に、東京や大阪などの都会から多くの人材が集まったという実話を基に描かれた作品。田舎に住むと、近所付き合いや自治会の行事、お祭りへの参加、消防団活動など、都会の人は参加したくないであろうと思いがちであるが、都会はそういった人間と人間の付き合いがなく、実際は田舎の活動をしたいと思っている人が多いということに気付かされた。都会の人に恵那市の素晴らしい資源、棚田やボルダリングなど、都会にはない情報を上手く発信することが大切では。
先日『半分、青い。』婚活ツアーがあり、東京から女性が多く参加した。男性は、恵那・中津川の地元から参加。6 組のカップルが誕生した。今、都会の若者は、都会に飽きているように感じる。
恵那市が『住みたい田舎』ランキング東海エリアで第 2 位にランクインした。大変喜ばしいこと。市と民間でタッグを組んで、都会で移住者を募るイベントを仕掛けるなどの施策をどんどん行っていくことが重要ではないか。」

〇森岡会長「企業は昔、企業単位で運動会などを行っていたが、どんどん廃止された。しかし、自分はその企業でどこに存在しているのかが見えない。そういった感情も生まれるようになってきた。今、また企業の運動会を復活しようという動きが出ていると聞く。自分を発見できる場所が田舎にはたくさんあるように感じる。特に、恵那市には素晴らしい資源がたくさんある。そういったものを上手く都会へ情報発信していければ。」

〇委員「問題なのは、田舎には仕事がないということ。通信網の発達で都会の仕事が恵那市でもできる時代。モデル事業として成功させ、都会から

の企業を増やしていくことも大切では。」

〇森岡会長「シニアの掘り起こし。仕事をしていない人にいかに仕事に就いていただくか。事業承継や創業。恵那市には、仕事に結びつけるような資源が豊富にある。農業・林業・観光など。
IoT の時代。生産性の向上がこれからの働き方に大きく関わってくる。今まで都会でしかできなかったことが、これからは環境の良い田舎でできる。田舎ならではの環境の良さで生産性も上がる。恵那市らしさ、新しい働き方のモデルを作って、進めていくということの意見であったと感じた。」

〇委員「恵那南高校の校長先生の話。東京の賃金は恵那市と比べものにならない。高校生は都会にあこがれを持ってしまう。ただ、一般的な世帯が生涯稼ぐ金額と使う金額を東京と恵那市で比べたとき、圧倒的に恵那市で使う費用が安いという話を生徒にしているそうだ。こういった情報も、子どもにも分かりやすい資料に整理して、恵那市内で発信していくようなことも考えていくと良いのではないか。」

〇森岡会長「続いて『林業分野』について、事務局から説明を求める。」

〇事務局
・「林業分野」について、7・8 ページと 41・42～43・44 ページを説明。

〇森岡会長「事務局から『林業分野』の成果と課題、今後実施すべき事業の説明があったが、この件に関して意見はあるか。」

〇委員「林業は全く儲からないし、他の分野と比べても人材不足は大きな問題。ハローワークの紹介で、4 人ほど森林組合に来ていただいている。現在は、林業という職業の価値観を持った方が遠くから来ていただけるのが現状。地元での人材確保は難しいが、この地域での人材確保のためにも将来を見据えた次世代の人材育成を行っていくことが必要不可欠。
林業が専業の企業の設立は難しい。また、仮に就業したとしても、山の管理はきついし危険。一般のサラリーマンより低賃金。なり手がいない。働きがいのある産業にしていくことが目指すべき林業の姿である。」

〇委員「県では森林環境税が創設されている。この税金を活用しながら将来を見据えての活動を進めているが、現状は山を守っていくことだけでも大変。木の産地はたくさんあるが、全国的に見ても林業は衰退している。ただ、九州の林業の賃金は約 12,000 円（日当）と聞く。恵那、中津川市は、8,000 円程度。地域によっても大きな格差がある。
今、山は危機的状況である。木がどんどん成長していってしまっている。外国の安い木には勝てない。昔は原木で輸入されていたが、今は材木に加工して付加価値を付けて輸入される。
生きた森を育てて管理していくことは非常に大変。行政の支援なしでは進めていけない。また、民間の方にも支援や協力をしていただきたい。
山は田舎の問題と都会の人は思っている。しかし、山の恩恵を受けているのは田舎だけではなく都会も同じこと。そういった都会の人の間違った認識を変え、正しく理解していただき、都会とも協力しながら活動し

ていくことが大切。」

〇森岡会長「これからは環境重視の時代となる。企業も環境を守る取り組みが必要。山の重要性を多くの方に知っていただき、積極的な事業展開を行っていかなければいけない。林業分野はどんどんやっていくことが大事という意見であったと思う。『林業分野』については、以上のような意見でよろしいか。」

〇森岡会長「続いて『農業分野』について、事務局より説明を求める。」

〇事務局
・「農業分野」について、9・10 ページと 45・46～61・62 ページを説明。

〇森岡会長「事務局から『農業分野』の成果と課題、今後実施すべき事業の説明があったが、この件に関して意見はあるか。」

〇委員「農業分野では、『図書館マルシェ』が実施されている。平成 31 年度H31 年度からは、恵那まちなか市のイベントの中に特設コーナーを設けてマルシェを開催したいという提案があった。農と商店街の連携につながる事業としても推進していく必要がある。」

〇森岡会長「一つずつを差別化してもらいたい。他では真似できない物など。違う物を作るだけでなく、違いを知ってもらい、さらにその人が発信してもらうこと。どこにもないという差別化をしていくことが重要である。」

〇委員「農作物は工業製品にはなり得ない。同じ物を作ることができない。そこが良いところでもある。きなぁた瑞浪では、野菜の陳列を産地ごとで並べている。産地ごとで競争させて良い物を作ってもらう。同じ物にも差があるということが農作物。そういった差別化は大切。
図書館マルシェのまちなか市への出店について、若手が少量でも良い物を作って売ろうとしている中で、軽トラ市などの野菜と同じ場所で売ることを少し心配している。少量でいいのでこだわり、小さい農業をどう残していくのかが重要。京都では京野菜が有名だが、京都産の大豆がない。それは大豆農家が丹波の黒豆作りに走ってしまったから。酒席での乾杯時に、乾杯は地元の酒で行うことが京都の条例にある。地元産の野菜をいかに地元で育てて消費するかが非常に大切である。」

〇委員「真似できないものを作っていくことはとても重要。そして、農業と観光を結びつけること。観光カリスマの山田桂一郎さんは『地産地消』ではなく逆の『地消地産』と言っている。その地域『らしさ』を徹底していくことが、恵那市に来る人の喜びにつながる。外国人旅行者が一番残念だと思うことに、どこの地域（山奥）へ行っても、食事にマグロとイカの刺身が出ると嘆いているという話がある。その地域らしい食材を提供することが必要なんだと分かる。
マドリードの近くにあるサンセバスチャンという街では、地元の農家と漁師と提携して、その地でしか食べられない食材を提供して成功を収めている。マインドを徹底的に変えていかなければいけない。

山田桂一郎さんは、通信販売の普及で、恵那・中津川市の商品販売額が数百億円規模で減少したと話された。その 1%の消費を地元に変えれば、数億の効果が生まれる。そういう認識を地元の方が持つことが必要だと言われた。消費者も飲食店主も皆が地元産に目を向けていただくことが大切である。」

○委員「瑞浪市では、多くの飲食店で瑞浪ボーノポークを扱っている。しかし、恵那市の地元産である三浦豚の表示を恵那市ではあまり見ないように思う。皆が地元の物を大切にすることにより、そこから地域ブランドができてくるように思う。」

○森岡会長「小さいことから始めてそれを育て、大きくしていく。その中で見えてくる将来像に向かってピンポイントで取り組んでいくことが重要だと感じる。」

○委員「私は、農業振興協議会長として恵那市の農業分野に携わっている。もうかる農業を大きなテーマとしているが、やはり売る場所がほしい。そして、作って持っていくという仕組みにも問題がある。今日作物があるが、明日は同じ物が出荷できないため、販売できないという問題。こういった仕組みそのものを変え、少量の物を多品種作りながら、代替えできるような産地づくりになれば、それがブランド力になると思う。」

○委員「小さい子どもの頃からの郷土愛教育が必要ではないか。過去の郷土と現在の郷土を学ぶ。フィールドワークを含めて。農業、観光、全てのことについて知る機会を設けることが大切では。恵那市を好きな子どもを育てることが、強く求められているのではないか。」

○森岡会長「多くの意見をいただいた。『農業分野』その他全体的に意見はないか。今日いただいたさまざまな意見を計画に反映し、さらに発展させていただきたい。それでは、今後のスケジュールについて事務局より説明を求める。」

６．今後のスケジュール

○事務局「本日、委員の皆さまからいただいた意見をまとめ、検討部会で再度ビジョン素案について調整する。再調整した内容を次回 3 月の振興会議で報告し、今年度のビジョンアクションプランとしてまとめたいと考えている。」

７．閉会

○森岡会長「今回の会議はこれで閉会とする。」

【1/30 第１回恵那市産業振興会議意見まとめ】

●商業・観光分野
・クラウドファンディングは、本当に良いものを上手く発信していくもの。それを磨いていくことが重要
・「麒麟がくる」では、情報を先取りして事業を実施していくことが重要
・他地域と連携した事業実施を
・ドラマ放送時の一過性の取り組みではなく、継続していくことが重要

●工業分野
・シニア層の就職率、また、働いていない女性をいかに就職につなげるかがとても重要
・都会の大学へ進学した方が辞めた時、いかに地元に戻ってきてもらうか。いかに魅力を発信できるかが今後の活動の課題
・田舎志向の人に都会にはない情報を発信することが大切
・市と民間でタッグを組んで、都会で移住者を募るイベントなどを考える
・ＩＴの発展で、都会の仕事が恵那市でもできることをモデルとして示す
・生産性向上がこれからの働き方に大きく影響
・都会と恵那市での収入・支出の違いを分かりやすく整理し子どもに提供

●林業分野
・将来を見据えた次世代の人材育成が必要
・林業はもうからないので担い手も少ない。働きがいのある産業にする
・森林の恩恵を都会の人も受けていることを理解してもらい、都会と一緒に活動

●農業分野
・マルシェとまちなか市のコラボは連携事業として推進していきたい
・他では作れない物を作り、違いを知ってもらう情報発信が重要
・きなぁた瑞浪では産地ごとに競争させて良い物を作らせている
・少量生産の小さな農業をどう残していくかが課題
・地元の農産物をいかに地元で消費してもらうかが重要
・その地域らしいメニューなどを徹底していくことが来訪者の喜びにつながる
・少量多品種で代替できる産地とする

●各分野共通
・新たな大変革が起きようとしている。人がいない中でどうやっていくかが今後のテーマ
・郷土愛教育が必要。恵那市が好きな子どもを育てる
・1%の消費を地元に変えれば数億の効果が生まれるという認識を地元の方が持つことが重要